
少年少女のソノリティ

佐久間 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女のソノリテイ

【Nコード】

N3897Y

【作者名】

佐久間 朔

【あらすじ】

春からこの狭丘学校に通う事になった俺。バンドやりながら平和に過ごそうと思ったんだけど…衝撃的な出会いをした少女とか親友達とかバンドメンバーを巻き込んで平和どころか落ち着けない学園生活に！こいつら止まる事を知らんのか！…え、俺もその仲間だ？と言う感じの学園ドラマです。この子達で青春したりラブラブしてるのを覗いたりドタバタしたりシリアスになったり。暖かく見守ってやってください。

新たなる始まり（前書き）

前のアカウントを消しての再投稿です。
題名とか色々いじってます。

新たなる始まり

「春。俺―阪上芳樹>さかがみよしきは高校生になった。と言っても半分くらいは地元の友達だったりするからあまり変わり様がない気もするのだが、やはり新しい所は胸が踊る。」

俺の通う学校：狭丘学校。4階建て3棟、温水プール完備、ライブスタジオ完備というなんとまあ公立高校の割にはやたらと設備の良い学校だ。

入学式なので、小学校からの友人 南部幸平>なんべこうへいくとこの学校の入学式に来た。
短髪で容姿端麗どちらかというところ可愛い系か？凄く優しい雰囲気俺の親友だ。

「やっぱり、新しい学校はいいねえ……」

今縁側にいるおじいちゃんの様なほんわかした表情だ。
これが女子の心を捉えるのか？と思う。

「言っておくけど、芳樹もかっこいいからね？」

「かっこよくなるはないが……どうやって心の声を読んだ？」

「高校で良い事有るといいねえ……」

「いや、話の話題さりげなく変えないでくれない？」

「あはは…ごめんごめん。でも、ちょっとワクワクしない？」

確かにそうだなと言い返し、何と無く校舎を仰ぎみる。

彼女の3年間でどんな出会いがあつてどんな人と会つてどんな風に過ごすのかな…

「…芳樹、カッコつけてる？」

「今の感傷的な気分返して！」

ポコッと殴つた。幼馴染つてのはいいけど心の中まで見透かされるから嫌だ。

俺たちは入学式が行われる体育館に入ってきた。ここで一緒にクラス発表も込めてしてしまうらしい。張り紙に貼つて有るクラスの名簿を見てクラス別に座るらしい。

「おい、芳樹くん！幸平くん！

こつちだよ！」

ソプラノが響いた様な声が出た。隣を見ると幸平が笑顔になつてた。分かりやすい。

「真琴さん！同じクラス？！」

「うん！芳樹くんもだよ！宜しくね？」

「ああ、真琴さん。宜しく！」

俺たちが真琴と読んだ女の子…磯部真琴だ。俺の場合は中学からの友人。幸平は幼稚園の時の幼馴染らしい。

150cmぐらいしかない身長。茶髪黒目…この茶髪は地毛らしい。後ろに一本で束ねられてる髪はどこか尻尾に見える。

何処かリスの様な小動物を彷彿させる。目とか完全にリスだしさ…！
で、幸平の好きな人。こんなに分かりやすかったら直ぐに分かるよな。不思議な事に真琴さんはわかってないんだ。

で、真琴さんは幸平の事が好き。前にもバレンタインデーやら何やらで相談されてる。

もう、焦れたい…何かのラブコメを見てみたいな感じだ。

「でさー…でねー…」
「へー…それってさー…」

あら、見事に二人の世界になって俺は取り残されたよ…

とりあえず入学式が始まるまで寝る事にしますか…

俺が起きると入学式が始まった。後ろにいた金髪のいかにも遊び人みたいな奴に起こされて気づいた。隣は幸平なのだが…まだ真琴

さんと話してらあ…

色恋もいいけど、少しは親友と見ろや。

いろんな思いを混ぜて幸平の足を踏んだ。

叫び声が響いたのはしょうがない。お前が悪い。

始業式が終わると教室に入らされ教員が来るまで待機になった。

俺はたまたま隣になった幸平と話していた。

「今日、芳樹の家に行つていい？」

「ああ、いいぞ。でも、散らかってるからな」

「ああ、ギターね…触らせてくれる？」

「構わんよ」

今出たけど、俺はギターが好きだ。Freedomってバンドにハマって始めたんだ。

かれこれ2年はやってるのかな。やるほどハマるから楽しいんだ。

「…寝るから適当に起こしてくれ…」

「ん、分かったよ」

そうして俺は意識を閉ざした。

何か夢を見たが…忘れた。とりあえず、帰って幸平と遊ぼう。

隣にいる幸平に声を掛けて学校を後にした。

新たな始まり（後書き）

感想お待ちしています

寝過ぎには「注意」(前書き)

初めは芳樹君の夢です。

寝過ぎには注意

何か夢を見た気がする…横には髪の毛の長い少女。

俺は彼女と手を繋いで歩いている。

周りには幸平達がいる。

なんだろう…暖かい…

俺は少女に向かって話しかけてる。

なあ、ほーー

なあに、芳樹

私毛

そしてホワイトアウトして行くー

目覚ましの音が聞こえている。

もう起きなきゃな…

ふと時間を見ると8:00。いつも目覚ましはこの時間だからこのまま寝ても大丈夫かな…

いや、ちょっと待て。今日学校じゃないのか？

ガバッと起き上がり、万能時計で日付と曜日を確認する。 4 / 10
木曜日。天気は晴れ、湿度は40%…ヤバイ！

咄嗟に布団から飛び降りようとすると足が纏れ、いい感じに頭から床と衝突した。痛い…

朝ご飯作らなきゃと思ったけどやめた。適当にプロック食品を食べ
て腹を満たす。

ウチには母親も父親も居ない。

居ないと言うのには語弊があるが、父親は他県で赴任中。

何にも新しい事業の開発で責任者に大抜擢されたとか。

詳しくは知らない。

で、母親の方はその父親を追いかけて行った為、俺は1人寂しくこ
こで暮らす…と。

それが分かったのは高校に受かってからだったから今更受験し直す
のが面倒だった、というのもある。
友人が居るからもある。

さて、部屋をかたして必要な物をエナメルバックに詰め込んで家を
出ると既に8：15過ぎだった。
何に手間取ってたのやら…

今から走って行けば…多分間に合う筈。

と思い、バックを担ぎ直して走り出した。

「ぜえっぜえっ……」

ずっと走り続けるのは酷なのだ。でも10分近く走り続けると思う。でもそのお陰で残すところ学校に着く直線道路だけだ。ここまで来れば多分間に合う筈だ。

少し舐めてた。と言うのも自分のクラスは下駄箱から最も離れた場所にあったのだ。いや、今思い出した。

と言うわけで俺はまた全力疾走。階段とか2段飛ばしです。バックが取り残されない様にギシギシ音を立てて耐えてる。

「そこのお前！危ないから止まれ！」

凜とした声が聞こえた。

上を見てみると黒髪がなびいていた。つか、どんだけ髪なげなんだ！腰まで有るぞ？

これが一瞬の出来事。体は動かさずその女子に突っ込んで行った。情けなさすぎる……

「きゃあ！」
「うわっ！」

咄嗟に庇おうとして俺が下敷きになる。床に叩きつけられた瞬間、肺から強制的に二酸化炭素が吐き出された。

「ごほつごほつ…大丈夫か、あんた？」

自分の体の上に覆いかぶさってる少女に話しかける。少女は心配と憤怒が混ざったような顔で見て来た。何と器用な…！

「走ってくるからでしょ！大丈夫、あんた？」

「大丈夫だから…早くどいて」

色々マズイんだ。何がマズイかは想像にお任せします。

少女が退いてくれると急いでたことを思い出した。

「とりあえず、急いでるから…」

キンコーンカーンコーン…

よく聞く学校のチャイムが鳴った。つまりは8:30、HRが始まる時間。

遅刻って事。

俺は少女に早く教室行けよと声を掛けて慌てて教室に入る。

そこには担任の初老の人が居て、頭を出席簿で叩かれた。

初日から遅刻とか最悪だ…！

寝過ぎにはご注意ください(後書き)

感想お待ちしております

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則（前書き）

幸平君と真琴さんやらかしています。

因みに芳樹君はハイスペックな高校生です。

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則

「やあ、間に合わなかったねえ……」

「走ったから間に合うと思っただけだな」

隣にいる幸平が話掛けてきた為、振り向く。

「何か災難だね。僕が起こしに行つてあげれば良かった？」

「男に起こされる趣味は持ち合わせてねえよ」

やめてくれ、開眼一番こいつの顔とか。生きてる心地がしなくなるわ。

「あはは。で、何で遅れたの？今日のテスト勉強？それともギターでもやってたのかな？」

「ああ…ちよつと音のレパートリーを増やしたくてエフェクターをちよつと…え？テスト？」

え、何それ。聞いてないぞ？

「うん、何か新入生テストするつて言つてたよ？」

「え、知らないんだが…」

「いや、しつかり帰りのホームルームで言つてたよ。主要三科目のテスト」

…マジすか。昨日寝てた時か？

「芳樹、爆睡してたからねー」

「いや、起こせよ！」

声を張り上げたため近くの女子がビクッとさせてしまった。誤った所で…

ガララッ！

「をし、テストやるぞ」

もう諦めた。しるか、テストなんて。適当にやって睡眠時間確保したるわ。

「おーい？芳樹？早く顔上げて？」

…嫌だ」

中学校の復習に近かったからそんなには難しくなかったけどさあ

「…分かるか、幸平？この漢文を現代訳しろなんて？」

「ああ、分からないよねー…あういう問題は嫌いなんだよねー。」

できない仲間を見つけて喜ぶのは性だと思う。で、開き直ると。皆

もするよな…え、しない？

「だよな！無理だよな！」

「うん、それだけできなかつた気がするよ」

一瞬でも仲間だと思つた俺が馬鹿だつた。今から制裁を…

「2人で何話してるのかな？」

真琴さんが話しかけてきた。うん、1日ぶり。

「や、やあ真琴」

「よう」

どもりながらも返す幸平と俺。こんなに好意が体面に現れてるのに気づかない真琴さんも凄いものだ。いや、真琴さんも同じ様な感じだけ。

「いや、ちよつとさっきのテストの話をしていてね…それでできなかった問題あつたという話なんだけど」

「へえ…そう言えばわたし数学ダメだつたなあ…」

「真琴さんは数学？僕は漢文だめだつたよ」

「え？そつなの？じゃあさ…」

「えー、何？」

わいわいきゃいきゃい、完全に2人の世界。世界が終るまでは…いや、違うか。

俺の目の前でいちゃつき始めましたよ。真琴は真琴でむっっちゃ笑顔だしさ。

「もう、お前ら付き合っちゃまえよ。そう俺は思った。いや、誰でも思う筈だ！」

「すげえな、あいつら…あれで付き合ってねえんだろ？」

ほら、居た！嬉しくなって振り返ると昨日起こしてくれたチャラチャラした男がいた。確か…

「紗東？」

紗東翔一と自己紹介してたのを思い出す。うん、クラスメイトの名前を頑張って覚えるのが溶け込む第一のコツ。

「何て、他人行儀な！翔一て呼んでよ！俺も芳樹って呼ぶからさ！」

やっぱ、言う事はチャライなあ…いや、これでチャライとか言っていると小説の登場人物で会った途端に下の名前で読んでくれというのが全てチャラくなるんだけどね。

「ほらほら、遠慮しないの！呼んでみ、芳樹？」

俺の沈黙は困っていると解釈されたらしい。まあ、別に読んでも良いんだけどね。

「ああ、宜しくな翔一」

「お、呼んでくれた。宜しく頼むぜ、芳樹！」

友達1人できました。

「そっいえばさ、俺ベースやってるんだけど…芳樹は何か楽器やってるの?」

「うん、ギターなら…」

「えっ、マジかよ!一緒にバンド組もうぜ!」

何か結成したのが40歳ぐらいだった有名バンドを彷彿させる様なワードだけど…

「やろうぜ!」

悲しいかな、楽器を持つてる人同志は仲が良くなりやすいんだ。

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則（後書き）

感想お待ちしています

弁当は暖かいと弁当とは言わない(前書き)

色んな人の小説読んできると…何か文字数が少ない様な…

弁当は暖かいと弁当とは言わない

朝、俺はもう遅刻しない様にしっかりと目覚ましをかけて定時に起きてコンビニで昼飯を買って学校に着いた。

教室に入ると幸平と真琴さんが話していた。大方、一緒に登校と言う事だろう。

「あ、おはよー芳樹」

「おはよう、芳樹くん」

「おつす…相変わらず仲がよろしい事で」

軽い皮肉を入れてやった。朝からいちやつかれると満腹感が凄いのだ…逆恨みでは無い、決して。

「やだあ、仲が良いなんて…」

「ねえー」

ダメだ…バカカップルにはこんなの効かねえ…

「おつす、芳樹…何、この雰囲気」

肩に手をかけられたから振り返ると翔一がいかにも爽やそうな顔で居た。

「やっぱ、あいつら付き合ってるんじゃないね？」

「俺が知る限り付き合ってるとかは聞いてないぞ？」
「でも…あれ相当年数の経ったカップルの会話だぞ？」

耳をすませば（これが何なのか分かる人は拳手）「明日はおこしてあげる」やら「明日はたまには変わった喫茶店で」だの、聞こえてくる。

「うっわ、本当だ。甘ったるい」

見るに耐えない映像だ。どっかの動画サイトに投稿したらきつと「リア充氏ね」って帰ってくるだろう。ほぼ100%

「で、あいつらどうするの？」

「…ほっとくしかないよ」

中学から同じだから分かるのだが、ああなると止められなくなる。時々グループ学習で同じ様に甘い雰囲気を出してて教師も呆れただぐらいだ。

因みに俺やそれなりに知ってる友人は生暖かい目で見てた。

「じゃあ、ほっとこう。どうせ、止めらん無いんだろっ？」

うん、と返しバカップル共を眺める。よく、飽きないね。

HRが始まると流石に甘い雰囲気は無くなった。HRが始まっても雰囲気を出してたのなら本格的に引き離す事を考えた方が良い気がする。

担任曰く、今日から1週間で部活動を決めるらしい。提出用紙やら部活動一覧用紙を渡された。まあ、元々軽音楽部入るつもりだから明日にでも出すかな。

HRが終わると翔一と幸平が俺の所にやってきた。

「翔一と芳樹は軽音楽部だっけ？」

「おう、そうだな。前に翔一とバンドを組む約束をしたしな」

結構軽いノリだったけど、こいつなら何だか行けそうな気がしてきてから…本気でやる事にした。

「んで、幸平は真琴さんとどこに入るんだ？」

「…僕は翔一の中で真琴とどっかに入るのが普通になってるのかな？」

「うん」

「悪いが、俺もそう思う」

「まあ、事実なだけだね」

マジかよ…部活内であるの雰囲気を出したなら…部活崩壊しそうだな…アーメン。別にキリスト教徒と言っわけではありません。

「で、どこに入るんだ？」

「うん、天文学部にも入ろうかなと」

「へえ、幸平って星とか好きなの？」

いや、俺も知らない。どうなんだ？

「いや、そういうわけじゃ無いんだけど…まあ、真琴が興味あるから入りたくなっただけなんだけどね」

結局、それかよ…と思いつい溜息をつく。どうにかしてくれ、このカッブル。

初めての授業…昨日やった筈のテストが返却された。何か添削早くなえか？仕事量凄いな。

「うっわ、最悪…」

で、結果は全体的に70点台。流石に凹む。中学生時代は90点連発だったんだが…やっぱり高校の勉強は難しいということだろう。明日からは頑張らねば…

「芳樹…どうだった？」

「んあ、平均70ぐらい」

すると幸平はびっくりした声で叫んだ。

「凄いな！慌ててきて遅刻したのに…実は勉強してた？」

「いや、全く。つか、これって中学の復習だろ？そんなに難しい訳じゃ…」

「これさ、相当難しい問題集から引っ張ってきてるらしいよ」

…へえ、道理で習ったやり方じゃ解けないわけだ。

「俺、勉強したけど平均30だからな」

と翔一が見せびらかす。

「芳樹はなんやかんや言ってるよねー。凄いよ…」

と幸平が笑いながら言う。まあ凄いのかな？と適当に流す。

「流すな！俺がいたたまれない！」

ごめん、スルー。

昼食、俺は今朝のコンビニ弁当を広げた。冷めても美味しいのが弁当だと思う。

で、幸平は真琴さんに引たくられてどこかに行った。今は翔一が前の席に座ってる。

「…？お前飯は？」

「いや、もうすぐで来るよ」

何言ってるんだ、こいつはと思うと翔一くんと呼ぶ声がした。

「おう、緋奈…いつもありがとな」

「いえいえ…将来の予行演習ですしね」

小綺麗な人が入ってきた。茶髪に少しフワフワしたような髪。全体

的にお嬢様みたいな雰囲気を出している。ここん所びっくりする」とがたくさんありすぎだ。

「し、翔一。その人誰だ？」

すると翔一は何とも言えない表情を示し、女の子は笑顔になった。たまたま近くを通りかかったクラスメイト（男子）は思わず見入っていた。

「ええとね…こいつはね…」

「翔一君と私は許嫁です！」

へえっ…って許嫁え？！

どうなってる、俺の周りは！

弁当は暖かいと弁当とは言わない(後書き)

好きです、ジブリ映画。

衝撃的（笑劇的）な出会い（前書き）

登場人物が揃いつつあります。

衝撃的（笑劇的）な出会い

「おい、緋奈！芳樹が混乱してるぞ！」

「あらあら…どうしましょう」

うふふっと上品に笑う。

「で？説明してくれんか？」

「…ああ」

翔一が緋奈と呼んだ女の子は銀中央緋奈と言い、翔一の婚約者。

銀中央家は紗東家と親同士が同級生でもし男と女が生まれたら結婚させようと宴会でノリで決められたらしい。

この場合、後悔してるのはどっちやら…

でも、銀中央さんは嫌では無くむしろ翔一と一緒になれる事が嬉しいらしい。なので婚約は破棄されずに残ってる、と。

「これどこの漫画の展開だ！」

「ちよ、芳樹?!」

「あれか?! 幸平といい翔一といい独り身の俺に対する侮辱か?!
ちくしょう!」

「落ち着けー!」

「はあ…落ち着いたか？」

「うん…」

そりゃ落ち着くよ。翔一に思いつきり頭から水をぶっかけられたもの。お陰でワイシャツはビショビショだ。今はベランダに干して有る。

ふと周りを気にしてなかったから見てみると俺に同情するような目で見てきてるクラスの女子。

お願いだからそんな目で見な。悲しくなるわ。

「ふう…しかし婚約者ねえ…」

「そんなの昔に滅びたもんだと思ってた」

確か一家の当主が娘を嫁に出すとか前に歴史で学んだ気がする。

「私は滅びてないと思いますよ。現にここにいますから」

と言って翔一にキスをした…てえ？！

「おい、緋奈！何してんだ？！」

「何って、キス」

「そう意味じゃなくて、どうしてここでしてくるんだ！」

ギャーギャーワーワー。クラスからは翔一滅殺計画も練られてるっぽい。本当に殺さねかねん。

その言い争いは次の授業が始まるまで続いた。
出て行く際に銀央さんは

「今夜は全て搾り取って私が母親になるまで付き合ってもらいます
！」

とどう考えたってそっちにしかとらえられないようなセリフを残して消えた。

放課後、部活動見学とやらがあるみたいで翔一に誘われたから行く事にした。

俺としてはさっさと帰って明日にでも部活動参加用紙を提出したいんだけどな。

まあ、雰囲気だけでも味わいに行きますか。

どうやら新入生歓迎ライブとやらやるらしく、俺はそれに行く事にした。

特設プレハブには人で溢れていた。ただ、全員が全員軽音楽部に入るわけでも無いだろう。多分、物珍しいから来たミーハーな人達だと思う。

「うわあ、スゲえな」

「だから物珍しさに来ただけだつて」

「いや、まだ一回しか言っていないよね?!」

「心の中で言ったわ!」

「知るか!」

まあ時間つぶしになった気がする。

それから程なくしてライブが始まった。全員が静かになる所が凄いなと思った。

「今日は来てくれてありがとう！部長の立川です。最後まで楽しんで行ってくれたらなと思ってます。では、最初のバンド、どうぞ！」

と入場してきて最初の演奏が始まった。会場もみんな乗っている。隣にいる翔一も楽しそうだ。

ライブはプロアマ関係なく一体感が出るから楽しいんだよな。

最後のバンドは部長がボーカルを勤めてるバンドだった。

それなんだが…本当にアマかと言えるレベルでうまかった。リズム陣は安定しながらも自己主張してるしギターもやってるから分かるが慌てる事が無くてゆとりを持って引いてる。ボーカルも伸びが良くて高音も外さない。

それはロック曲でもバラード曲もはずはなかった。

会場が熱狂に包まれる中、俺は完全に魂がそのバンドに奪われていた。

外に出ると俺はまだ体が熱を持っている事に気がついた。相当熱中したのだろつ。

「やべえな…あのペースみたか？ステイニングレイだぞ…しかも学生とかのレベル超えてるだろ…」

「凄いよね」

高校の間…あの人達をリスペクトしたい。いつか一緒に…

「いつか一緒に対バンライブできるといいな」

「お、そうだな」

おっと、口に出てきた。

さて…帰るかな。翔一誘うかな。

「あ、あんた！」

「んあ？何だ？」

振り返ると腰まである髪の毛。見事な黒だ。真琴さんや銀央さんは可愛い系だとするとこいつは美人系だろうか。

「おい、この美人さん誰だ？知り合いか？」

いや、知り合いならお前とか言わないだろう？とりあえず言っ事は一つ！

「…誰だ？あんた？」

正直、覚えがない。女の子がガクツとこけた。お、ドリフだ。

「うら！少し前に階段で走るなど注意したでしょ？」

あー…何か居た様な居ない様な…

「…うーん…ああ、あのときの一緒に遅刻した仲間か？」

「仲間じゃないわよ！お陰である日は遅刻だったんだからね！」

「大丈夫だ、俺も遅刻だ」

「あんたは自業自得だろーが！」

ギヤーとか言い始めた。周りがこっちを見てるよ。うるさいからボリューム下げないか？目の前の少女はそれに気づいたのか赤くなつてボリュームを下げてくれた。ほっ…

「…えと…ごめんな？」

こういう時は素直に謝る。それが正しい。巻き添えにしちまったんだしな。

「べ、別に良いわよ」

何か更に赤くなった。きつとあっさりと謝られたから恥かしいのだろう。

「赤尾穂奈美」

「え？」

「私の名前よ。で、あんたは？」

「坂上芳樹だ。気軽に芳樹とでもさかみんとでもよしきんとでも読んでくれ」

「何よ、それ…分かったわ芳樹。私も穂奈美で良いから」

因みにさかみんは俺の中学時代のあだ名な。その頃何かと人の名前を
を　みんとか呼ぶブームがあつて、さかみんと呼ばれたと。

「穂奈美ちゃん、ここにいたんですか？あら、翔一君に芳樹君」
「おう、緋奈か」

銀央さんだ。つか、銀央って苗字すげえよな、誰だ考えたやつは。

「穂奈美さんと知り合ってたのですか？」

「いんや、俺は今知り合った。芳樹は階段で衝撃的な出会いをしたらしい」

「衝撃も受けたけどね」

誰がうまい事を言えと。

「私、穂奈美さんと同じクラスで初めて話したお友達なのですよ」

「ほうほう…あ、穂奈美？」

「何、芳樹？」

「あんな、銀央さんとそこにいる翔一はな…」

許嫁だと言つとびっくり仰天。俺と全く同じ反応したよ。

俺は気まずくなくなって顔を逸らし、銀央さんと翔一はニヤニヤ。
分かってない穂奈美は首を傾げていた。

衝撃的（笑劇的）な出会い（後書き）

アクセス数伸びますように（笑）

ミーティング（前書き）

実は… 40話近くストックあります。今はそれを編集して投稿し
できませんがね…

ミーティング

数日後、部活動参加用紙を提出した俺らに軽音楽部から今日ミーティングがあるから集まる通達が来た。多分、顔合わせとかするんだらうな。

「なあなあ芳樹？」

「うん？」

「敵つい奴いるかなあ？」

「日本語使い方おかしくねえ？」

凄いやつに言い換えた方が良かるうに…

「あれ、芳樹達集まり有るの？」

と幸平が話しかけてきた。何かニコニコと上機嫌っぽい。

「らしいぞ、ほれ」

俺は幸平に紙を見せてやる。

「へえ、もう集まるんだ。天文学部なんか来週の月曜日に集まるかららしいよ」

「ありま、案外遅いのね。で？」

「でって？何さ、翔一？」

「真琴さんと入るの？」

ニヤニヤニヤニヤ。真っ赤になる幸平を見て何か完全にゲスっぽい

にやけ顔の翔一。ただ、俺は注意できないぞ？

だって、俺も何かニヤニヤしてんだもん！

天文学部にはごめんだがとりあえず惚気まくって当ててやれ。
そしてまだ見ぬ天文学部よ、アーメン。

放課後、指定された教室に入る。まあ視聴覚室ってやつだ。するともう人が来てたのか20人ぐらいの人が入ってた。

「やつほー、芳樹！紗東くん！」

と呼ばれたから見てみると穂奈美と…あれ、銀央さん？

「おう、二人とも…軽音楽部だな？」

「そうよ、じゃなきゃここに居ないわよ」

「私もそうですよ、翔一君。手取り足取りバンドつてのを教えてく
ださいね」

「あ、ああ…」

何かどもる翔一。

どうにも穂奈美は中学校で合唱団に入ってたらしく歌はそれなりに
は…と言ってた。実際聞いてみないと優劣はつけられないから保留。
そのうち拝聴したいものだ。

で、銀央さんは穂奈美に誘われたらしい。何でもピアノをやってるらしいね。

その手のコンクールに何度も出て賞を取ってるらしい。因みに翔一お墨付き。

「へえ、じゃあ翔一さんとバンドやるの?」

「まあ、そうだな」

「頑張ってくださいね、ライブ絶対に行きますから!」

「うん、そうだね…」

何か翔一の様子が変だ…いや、進化はしないけどね。

「どうした、翔一?」

「……あんな事があつたからまともに緋奈を見らんない」

「はあ?」

何にも…あれだ。男女の契りってやつを昨晚ずっと翔一が枯れるまでやらされたらしい。そういや、銀央さんいつにまして輝いてるよ
うな…?」

いや、気のせいだ。気のせいであると願おう。

「翔一くん…恥ずかしいからあまり人に言わないでください…」
「……………」

もうダメだ、こいつらも。

ほど無くして部長と…顧問かな?が入ってきた。

「おうおう、新入生ども…よく来てくれた、ありがとう！」

どんにも部長はフランクな人らしい。前に立ちながらもヘラヘラしてる。

「俺の名前は…いいか。そのうち教えるわ！顧問は…いいよね？」

「いや、一応名乗ろうよ？顧問の古利根です。宜しく」

ぺこりと頭を下げた。礼儀正しい人だと勝手に評価。

「じゃー俺かー…立川でふ」

でふ?! そんなツツコミが思わず声にしまった俺。

「あ、いや…すみません」

「何さー、謝る事ないよー。ツツコミありがと！」

気にせず話し出す部長こと立川先輩。あまり細かい事は気にしない人なのかな。

で、これから1週間かけてバンドを固めるらしい。人数は自由だけど流石に20人まとめて一つのバンドは勘弁してくれと立川先輩から。うん、俺もそれは怖いと思う。

「えと…あんたら経験者か？」

「こいつは昨日だ」

「多分、そつちじゃない。つか、変なこと言うな！」

振り返るとむすっとした男が立ってた。メガネかけてどこか理知的

だ。

「いや…あんたらは何か楽器をやり続けているのか？夜の方ではないからな」

ありやま、何か悟られてらあ。

「一応、俺はギターは3年。翔一は？」
「俺も3年だ、因みにベースな」

すると男は笑みを浮かべた。これ、女泣かせの笑みだな。

「良かった。俺はドラム10年やってるんだ。どうだ、一緒にやらんか？」

「ちよええ?!」

10年だと!って事は…6歳から?!

「ああ…親父がドラムやっててそのおこぼれを貰ってな」
「ひよえ…すげえな」

びっくりしてると男の子は改めてこういった。

「で、俺をドラムとしてバンドにいれてくれないか？」

翔一に目配せをするとうんと肯定の意思が帰ってきたので決めた。

「ああ、宜しくな!」

ドラムゲット。後はボーカルだな。
もっと時間がかかると思ってたんだけど…案外あっさりしてた。

ミーティング（後書き）

何かお気に入り登録をしてくれた方が1人…ありがたやありがたや。

頑張りますねー！

これが次は水曜日に更新する予定です。

少年少女の会合（前書き）

さて…元の話より多くなってきました。

少年少女の会合

「お、そうか！俺は遠藤信汰って言っただ、宜しくな」

「ああ、俺は坂上芳樹」

「んで、俺は紗東翔一な」

簡単な自己紹介を行った。うん、結構行けそうだね。

次の日、俺はバイトしてると言う信汰は置いて翔一とボーカル探しに繰り出した。

「でも、どうやって探すのさ？拡声器使ってボーカルやらんか？とか聞けないだろ？」

「いや、何か前にコンタクト取ってきたボーカルが居たからそいつから当たろうと思う」

「…いつも間に翔一の所に？」

「昨日の後に話したんだ」

どうにもあの後解散した時にもう一人着たそうなの。

「で、会えんの？」

「ん、校門に居るらしい」

「んじゃあ、ま、行くか」

教科書やらノートをバッグに入れる。関係無いが筆箱はいつも置いて帰っている。帰ったってシャーペンぐらいはあるからね。

「うっわ、こいつ教科書持ち帰ってるよ」

「…翔一は持ち帰って無いんか？」

「もち！」

「いや、威張れないからね？」

それよりも早くしようぜと言われたので走った。

さて、どんなやつかな？

校門に行くとなんか目が細い…狐っぽいのがいた。うん、名前聞くまで狐で行こう、うん。

「おっす、ボーカル志望」

「ちいーす、ボーカル志望でっす」

「ははっ…一応暫定リーダー連れてきたぜ？」

「おお、宜しくな！」

「あ、ああ…」

何だ何だ？何か流される。会話に着いて行けてない。

「で、名前は？」

「えっ…坂上芳樹だ」

「宜しくう！俺は権大寺龍な！」

「あ、宜しく…」

すっげえ名前。純和風やん。親は寺の人か？

「そうだ、言つとくけど俺は寺の人じゃないからな。いつも自己紹介の時に聞かれるんだよなあ」

「へえ…そうなんだ？」

何とも掴みづらいやつだな。

「で、俺は入れてくれんの？」

「ん、ああ。因みにボーカルどんくらいやってる？」

「中学の時にやってたから3年目かな。歌自体は小学校から歌ってるから多分ピッチはハズさねえよ」

「へえ、凄いな。小学校が…」

何かドラムの信汰と言い龍と言いとんでもないのいないか？

「あれ、お揃い？」

すると信汰が下駄箱から出てきた。何かしてたのかね。

「この人ドラムか？」

「そうだね…こいつはボーカル志望の権大寺龍」

「ん、宜しくな。遠藤信汰だ」

「で、これで形になったのか？」

形になりすぎだ。凄いのが集まりやがった。

後日、スタジオに行く事になってこの場は解散になった。

数日後…スタジオの帰り道。あいつら本当凄かった。龍は高音から低音まで安定してるし翔一のベースも良かった。リズムを崩さずにベース以上の働きをしていた。

信汰はタム回しが良かった。高校生からツインペダルとは思わなかったけど…

俺、大丈夫かなあ？翔一は大丈夫だとは言われたけど。あいつらを見てると萎縮しちまう。

「ふう…」

「何、溜息吐いてるの？幸せ逃げるよ？」

「えっ…お前か」

「お前か、じゃない！私は赤尾穂奈美って名前あるよ」

穂奈美に会った。手には…本屋の袋を握ってる。本屋帰りかね。

「で、何で溜息吐いたの？おねーさんに話してみなさい？」

「おねーさんって…同い年だろっ？」

確かに知らなきゃおねーさんとやらに見えなくも無いが。

「良いの！良いから話してみなさい？」

「へいへい…えと…」

話してみた。集めた奴らが上手過ぎて着いていけるか心配なこと。居ても平気なのかという事も。

「えと…あんだバカ？」

「バカゆーな！」

これが悩みなんだぞ！しっかりと返事せい！

「えとさ、まだ一回しかやってないのに今からそんなの気にしてたら気が持たないわよ？何度もやってそれでダメだったら練習するなり何なり悩めばいいじゃない。モチベーション下がるわよ？」

「まあ、そうなんだけどさあ……」

それでもやっぱり不安だ。

「うーん…あ！じゃあさ、聞かせてよ！」

「はあ?!」

何言ってるんだ、穂奈美は？

「だからあなたのギター聞かせてよ。とーしろなりに評価するわよ」

「いや、でも弾く場所無いし」

「私の家が有るわよ！」

「男を呼ぶのはマズイだろ？」

「あんたヘタレだから大丈夫！」

「でも…」

「つべこべゆーな！」

「…はい」

押し切られた。これは将来かかあ天下築くね。

…何よ、心配してるほどじゃないわよ。普通に上手いじゃない。

「大丈夫じゃないかしら？」

「でもなあ…何か足りない」

「それなら足りないなりに何かしてみたらどうかしら？」

こればかりは本人しか分からないだろうね。

私には分からないこと。

「ありがとうな。帰るわ」

「あつ…夕飯食べて行きなさいよ」

「え、悪いし良いよ」

「別に気にしないから平気よ。それより、ね？」

どうしてだろう。ドキドキして何か帰って欲しくなかった。

少年少女の会合（後書き）

感想をお待ちしています。

カラオケでの惨劇(前書き)

うーん…話が伸びてる…下手すれば120話やりそうです。

カラオケでの惨劇

「…え、来週体育祭？」

朝一番、幸平に体育祭が来週に有る事を聞いた。

「うん、ほら学年通信の日程にも書かれてるよ」

「…知らんかった…」

俺はそういうプリント捨てるからなあ…提出プリント以外捨ててしまつ。それだから中学時代によく失態を犯したんだが…まあ良いや。

「んで…種目決めとかやらの？」

「いやさあ…昨日のHRで今日に決めるって言ってたよね？」

「知らん！」

「えばらないで！」

呆れ顔の親友。ごめん、次からは気をつけるから…

自身は無いがな！

実を言うと体育祭面倒くさい。だって埃っぽいし砂埃凄まじいし暑いし。

「芳樹ー！」

「うん？」

色々考えてると穂奈美が廊下に立ってた。銀央さんも居る。

「よう…翔一呼ぼうか？」

「はい。お願いします」

「おい、翔一！銀央さんだ！」

「あいよ、今行く！」

言い忘れたが今は放課後。朝言ってた体育祭の種目決めはした。すんなり決まったから楽だった。別に司会進行役では無かったが。

「ねえ、駅前のカラオケ行かない？緋奈と話してたんだけどね」

「ん、構わんよ。つか、行かねえと…」

「？何ですか、翔一くん？」

「…ナンデモアリマセン」

成る程、尻に敷かれるとはこういう事か。でも、尻に敷かれた方が生活は安泰らしいな。

「…シクシク」

「ありま」

心に思った事をそのまま口にしたら泣き出す翔一。…すまん。

「で、芳樹はどうする?」

ニコツと振り返ってこちらを見てきた。その表情に目を見開いたけど…ばれてはないよな?

「あ、ああ…うん、行くよ」

「よっしゃー!因みに真琴たちは行かないから」

へえ、何かあるのかな?

俺は深く考えないで学校を後にした。

で、駅前のカラオケに着いた。平日だからやはり空いてる。

「…はい、4人です。フリータイムで…はい」

今、穂奈美が部屋を取ってるため俺達は少し手持ち無沙汰だ。こういう時って少し暇になるよな。

「…翔一?どうしてそんなに汗が…?」

「いや…お前、緋奈が歌う時に耳塞げ」

「へ、何で?」

いやと言っておきながら翔一は耳打ちをしてきた。内緒ごとってのは鈍く無いし分かる。

「良いから、塞いけ。悪いことは言わねえ」

「何だか知らんが…了解」

とりあえず、翔一の意向に従う事にした。

「ほら、何内緒話してんの？早くしてよ」

「あ、ああ今行く」

いつの間にか取り終えたのだろう。穂奈美は早くしろと言わんばかりに腰に手を当てていた。

カラオケっても歌うものは限られてる。ミーハーな曲は勿論、Freedomの曲を歌う。それなりにCMにタイアップされてるから分かる曲も多いだろう。

と言っても、ロック以外そんなにわからなかったりする。後はクラシックぐらいだが…どう歌えと。

「じゃあ、取った人から歌おうか？」

「え、良いわよ。芳樹歌いなさいよ。最後に良いわよ」

「え、いいよ。翔一は？」

「いや、先に歌ってくれ」

カラオケでよく起こりがちなのは誰が先に歌うか。日本人って遠慮がちだから先を譲ろうとする。…え、そんな事ない？

「しょうがない、じゃんけんにするわよ。勝った人から時計回りね」

「了解」

「最初はグー、じゃんけん…」

翔一が先になった。翔一 俺 穂奈美 銀央さんの順番だ。これで
座席順は想像できるかな？翔一の右隣に俺。翔一の左隣は銀央さん。
銀央さんの左隣は穂奈美…って感じだな。

「じゃあ、行つきまーす！」

翔一が歌い出した…曲は…校歌?!何でカラオケに入ってるんだよ!

「ふう…終わったぜ、はいマイク」

「ああ…てか、何で校歌がカラオケに入ってただよ！」

「え、古くからある学校は入ってるらしいよ？」

「なんだと…」

初耳だ。お経が入ってるのは知ってたが…

「それより、ほら」

「へーへー…」

予約してた曲が再生される。うん、カラオケって実際に聞いているの
と音全然違うから分からない時がある。今回もそのパターンだ。
まあ、慣れたけどさあ。

「へー…芳樹Freedom好きなんだ」

「へえ、知ってるんだ」

穂奈美にマイクを渡しながら聞く。

「まあ、それなりにはね。詳しくは知らないわ」

「CD貸してやるのか？」

「そうだね、貸してくれるかしら？」

「明日な」

了解と言つと穂奈美も歌い出した。最近流行りのアイドルグループの曲だ。実はそんなに聞いた事無いから楽しかったりする。あまり流行りには乗りたくないのだ。

「ふう…じゃあ次は緋奈ね」

「はい、頑張ります！」

といい、歌い出す。って、あれ。耳塞いだ方がいいんだっけ？

「¥ 〒メ」

「げえ！」

何と言うか、声が高い！マイクがハウリング起こしてる！そして歌詞が聞き取れない！どんな声だ！翔一は耳を塞いでも顔を顰めてる。余裕が無い俺と穂奈美はそんな事をできる余裕がない。

「だから言っただる俺はこのハイハイソプラノが嫌だから耳を塞げって言った訳でだから忠告したのにつて何でお前は腕を掴むお前も巻き添えだつて何でだそんなに力いれんな俺を巻き添えにするなやーめーろつわあああああー！！」

とりあえず、癪なんで翔一も巻き添えだ。この瞬間、苦しんでる翔一を見て心から充実感がしたのはきつと気のせいであると願いたい。

そんな体育祭一週間前の出来事であった。

カラオケでの惨劇（後書き）

校歌がカラオケにあるという話ですが…これは昔からある由緒正しい学校だけあるそうです。

全部が全部あるわけではないそうなの。

まあ、ここではそんなの無視します。

体育祭（前書き）

想像以上に長くなっています。

二つに分ける事にしました。

体育祭

一週間経ち待ちに待たない体育祭の日。
砂埃の立ち込める校庭にイスを持たされ体育着に着替えて頭には青のハチマキ。これがクラスの判別する材料だ。

「さつて…嫌だなあ…」

「いきなり?!」

ツッコミを入れる幸平。それと苦笑をする翔一。
幸平は楽しみですと言わんばかりにニコニコしてる。翔一は…よく分からないけど恐らくワクワクしてるだろう。

「へへ、頑張ろうな」

訂正。こいつもそうとう楽しみにしてる。前日とかは普通だけれども当日にテンションMAXの奴なパターン…いや、無いか。

「はいはい…ビリにならない程度に頑張りますよ」

「一位取るつよー!」

「ええ〜…」

テンションが違いすぎる俺たち。

時は過ぎ場所は…過ぎない。さつきまで開会式だったのだ。校長がふざけたおしてコスプレをしてきたのは意外だった。そのおかげで誰か1人倒れたらしい。さつき救急車が搬送してるのを見た。これで中止にならないかと思ったけど続行するらしい。ちっ

「芳樹：お前から黒いオーラ出てるぞ？」

「早くおわらねえかなあ…」

「どうしたの？」

穂奈美か…あいつは赤のリボンだ。つまり敵チーム。赤尾穂奈美だから赤色か。なるほど。

因みにだが、学年毎に三色に別れている。俺たちの学校は6クラスあるので一色につき1学年につき2クラス、計6クラスで一つのチームが作られてる計算だ。

「よう、どうした？」

閑話休題。それよりも穂奈美だ。

「いや、芳樹って行事とか盛り上がらないタイプ？」

「違うけど…今回は異様に盛り上がらないんだ」

とにかく早く終わって欲しいということしか頭にない。

でも、そのうち熱狂して応援してそうで嫌だなあ…何か現金なやつっぽくて。

「きつとね、芳樹は照れてはっちゃけられないだけなんだよ」

「おい、幸平。変な事を吹聴するな」

「へえ、そうなんだ」

「ほらそこも理解したような顔しない！」

「ええ〜…」

「ええ〜…じゃない!」

「はにゃー?」

「はにゃー?……違うから!」

招き猫みたいなポーズを取って可愛いとは思わねえ!

「かなち…らのきせ?」

「最早、何言ってるか分からねえよ…」

「そうよ、確か芳樹が何に出るか聞きにきたんだわ」

「え、忘れてたんか?!」

「うん」

さっきの変な応酬は置いといて…確か俺は…

「棒倒しとリレー」

400持久走はどうか分からないけど棒倒しはメジャーだよな。

「へえ…応援したげるから私は応援合戦と借り物競争出るけど応援

ヨロシク!じゃあね!」

「おい、お前は味方応援しろよ!それと…」

「行っちゃったよ?」

はあ……しょうがないそれなりに応援してやるか…

白熱した棒倒しは終わった。何か肘に当たって歯が折れた奴が居るらしく保健室に緊急搬送された。俺も…何かテンション上がって

しまった。

そして昼食を取り午後の部。

初めは応援合戦なので穂奈美の勇姿でも見てやるかと思いきやそれにワクワクしながら待っているとチアの服を着た赤組女子たち。穂奈美も居る。

「て、ええ?!」

周りもびっくり。翔一も緋奈さんを見つけてびっくり。幸平は…真琴さんに目潰しされてる。憐れ。

「ちょ、何だよアレは…」

「何でしょうね…」

俺たちはニヤニヤが止まらなかった。女の子達が前で笑顔で踊ってるし服が薄いから……なのでちょっとニヤニヤが止まらない。

すると翔一はいきなり青ざめた。

「どうしたんだ?」

「緋奈が…いや、何でもない」

そこまで言われると気になるのが性だが、震え方が尋常じゃないからスルーする。ギャグではない。

しかし、さつきからどうしても穂奈美を探してしまう。あいつの踊りだけ俺には映えて見えた。

「やあ、芳樹くん」

ニヤニヤニヤニヤ。盛大なニヤけつつらをしながら穂奈美さんが来
ました。悪魔にしか見えない俺。

「はい、これ」

手渡されたのはさつき使ってたチアの衣装だ。どうしると？

「好きにしていいいから預かって！私これから借り物あるから持っ
てて！」

「あつ、ちよつとおい！」

行ってしまった。さつきから人の話を聞かない穂奈美。

「俺なら匂い嗅ぐぞ？」

「そんな変態チックな趣味は持ち合わせてないわ」

「それが緋奈のだったら…あ」

翔一の後ろに銀央さん。メアリーさんみたいなフレーズだな。

「そんなに私が欲しいならあげますよ、ほら！」

「ちよまチアの衣装渡すなそしていきなり体育着を脱ぎ出すなさつ
きのそういみじゃねえからつか芳樹笑ってないで助けるよ幸平逃げ
るなえ次が出番ならしょうがないつか緋奈泣いてるしあーちくしよ
う！」

とりあえず、落ち着け翔一。

グラウンドを見ると借り物競争が始まるところだった。危ない見逃す所だった。入場門から退場門まで対角に走りその途中にある紙にしていされたものをもってくるルールだ。

おっと、スタートの合図だ。

穂奈美は周りと同じくらいに紙に辿り着き指示を見て愕然とした。どんな無茶だったのだろうか？

他の人はそれぞれ指定されたモノを取りに行ってる。

「すみませーん、腕時計ありませんかー？」

とか普通だと思える事や

「彼氏だつてえ?!居るか、ちくしょう!」

あちらではお題は彼氏だそうな。居ない場合どうすれば良いんだろうな。失格？

彼氏が居ないから失格って……不憫……

穂奈美は紙を見て悩んだ顔を見るとこっちに来た。

「芳樹、着いて来て?」

「え、ああ……」

何だか分からないが着いて行く。これって自分のクラスを裏切ってるような感じもするのだが…皆はそこまで考えてないのだろうか？

色々と思案してるうちにゴールに着いた。二着だ。因みに一着はさ

っきの腕時計の人。あれが一番簡単だったらいいからな。

「はい、紙をください」

「え、あ、どうぞ」

紙を役員に手渡す。そいつは普通に紙の内容を読み上げた。

「はい、『一番仲が良い異性』はこの方であってますね？」

「はい」

…ナンダツテ？ナカガイイイセイ？仲買制？ちゅうばいせいじゃなくって？そんな制度は無いがな。

「はい、結構です。お疲れ様でした」

「はい…芳樹、帰っていいわよ」

「ちよっ…待てよ」

とりあえず、穂奈美を引き止める。説明を求む！

「さっきのはどついう事だ？！」

「だから言ったじゃない。一番仲が良い異性の人って」

仲買制じゃなくて仲が良い異性。

「じゃあ、ね！」

手を振って穂奈美は帰って行く。一番仲が良いって事は…いや違うか。

頭に浮かんだ煩惱を振り払い次に男子借り物にでる幸平の応援に行

く事にした。

アレ、体育祭楽しんでない？

体育祭の収斂（前書き）

最新話から来た方へ。

前話の続きとなりますので一っ戻ってください。

体育祭の収斂

どうやら男子の借り物競争も同じ様な感じになりそうだ。

さっき女子で使ってた紙をそのままにしてある。つまりは…そういう系の指示が沢山眠ってるのだろう。

あれ、内容によってはゴールできないらしい。恋人が居ないのに恋人とか。

体育祭実行委員が俺らに喧嘩をふっかけてるしか考えられない。

「幸平、頑張れー！」

真琴さんの応援だ。周りが五月蠅いから声援とか聞こえないはずだが…幸平はこつちを振り返り手を振った。

真琴さんがキヤーとか言ってるが俺としてはよく聞こえたなとしか言いようがない。

真琴さん限定地獄耳か？

また考え込んでるうちにスタートしていた。何かどうでもいい事に考え込む事が多くなった気がする。

さて、またお題がハチャメチャらしくタバコ貸せだのビールは無いかだの教師のカツラだの。叫びまくってるからこつちまでただ漏れだ。

幸平はまたしてもこつちに来た。…好きな同性とか勘弁な。こつちを薔薇色にしたかねえぞ。

「真琴、着いてきて！」
「は〜い」

良かった。一部にしか受けられないような展開にならないで、でもお題はなんだろう？ 幼馴染？ 仲が良い異性とか？

「なーんか、ラブラブだなあ……」
「それは周知だ。翔一」

呆れ半分、からかい半分の笑みを浮かべる翔一。どうでもいいが幸平はお姉様方に人気があったりする。曰く、『守ってあげて安心したところを襲いかかりたい！』だそう。この先輩は……まあそのうち紹介するよ。

ゴールに着くと役員が紙を読み上げてる。するとこちらからでも認識でぐらいに真っ赤になってた。どういふのだろうか。気にならない訳が無い。

いきなり泣き出した真琴さんと真っ赤な幸平。異様な光景だ。

「ただいまー！」
「どんなお題だったんだ?!」
「私も気になるー！」
「私もですわ！」

どこからか穂奈美と銀央さんが駆けつけてきた。あ、一箇所しかないね。
何か乙女センサーにでもかかったのか。目がキラキラしてる。どこかの少女マンガだ。

「えつとね…『好きな人』だって…」
「うおう！」

変な声をあげてしまった。周りの穂奈美と銀央さん、それとクラス
の女子どもはキヤーキヤー言ってる。いつも忘れてるのだがこいつ
らまだラバーズじゃないからな。

「ようやく結ばれるね！」

「え、あ、う、うん」

「うわあああああ！」

祝福するクラスメイト。照れる真琴さん。悲鳴を上げるクラス男子
一名。あ、幸平もだ。羞恥で悲鳴をあげてるのだろうな。

「で、幸平？どうするんだ？」

「どうするって？」

「だってよお、ここまでしといて放置するのはどうかと思っぜ？」

口を挟む翔一。俺ら二人は幸平をいじる事にした。観客付きで。

「ああ、うん。…後で屋上に呼び出して有るから」

最後は2人にしか分からないように耳打ちをしてきた。

「そっか。後はお前の言葉で言うだけだ。頑張れよ？」

「うん…」

照れて返事する幸平。この後、さらにラブラブ度が上がるのは言っ
までも無いだろう。

とりあえず、他でやってもらう救済措置を取らなければならないと思う。

そして、俺の出番。400mリレーだ。1人100m。俺以外に翔一と陸上部のやつ。

何で陸上部と混ぜるのかと文句を言ったのだが同じぐらいのタイムらしい。因みに早いもの順に並べたので陸上部A 翔一 俺 陸上部Bの順番になる。

陸上部曰く軽くストレッチしたほうが良いらしく、する事にした。

「なあ、芳樹？」

「何だ？」

前に動画サイトで見た手足の深呼吸をしていたところ話しかけられた。あいつは足を下げながら足の上げ下げ運動をしている。あいつもあの動画見たな。

「何や感や言つて体育祭楽しんでるだろ？」

「言つな。数時間前の自分を今ボコボコにしてる最中だから」

怠いとか言いながら楽しんでる俺。所謂、結構単純。

「まあ、最後だし頑張ろうや」

「ああ」

パンツと乾いた音が響いた瞬間、静寂から喧騒になった。
今は陸上部A…？美川ってやつだ。早いのだろうけど…それ以外の
奴がいかなせん早い。野球部やらサッカー部が混ざってる。

「おーい、？美川！ラストだあ！」

翔一の大声が聞こえてくる。あいつも張り切ってるなあ…
と呑気に考えてると翔一にバトンが渡ってた。銀央さんに声援でも
受けたのか知らないが急激に早くなった。

「おら、翔一。ペース落とすなよ！」

翔一がやった事を俺も真似して見た。俺もそろそろ準備を始める。
靴紐は解けてねえな。大丈夫だ。

「ラストお！」

最後の直線。バトンをもらうべく腕を後ろに突き出す。

…今だ！

俺は徐々に走り出しいい感じに加速し出した時にバトンが渡された。

少ししてカーブ。前に1人…後ろには…いや、もう横にいる？！
足が重くなってるのを感じながら離されない様に力を入れる。

「芳樹ー！頑張りなさいー！」

どこからか穂奈美の声援が聞こえる。どうしてか少し楽になって隣
の奴を抜かす。

最後の直線。最後は…確か風見だ。早くしろと言わんばかりにチラチラこつちを見る。

「風見！」

「俺は風鳥だ！」

そんな声が聞こえたがそれどころじゃない。春なのに暑い…

風見がゴールテープを切り喜んでるクラスメイトを見て一位になった事が分かった。

放課後…告白するからと言う幸平を置いて俺と穂奈美は帰ってた。

俺たちは学年二番。全校で8番と言うなかなかな成績だった。楽しかったから良かった。

「お疲れ様。体痛い？」

「そりゃそつだよ…」

全身から悲鳴を上げてる。歩く度に太ももが…

「私が全身隈なくマッサージしてあげようか？アフターケア付きでハートマークがつきそうで妖艶な笑みを浮かべてこつちに迫ってきた。

「う、そ！」

「ちくしょう！」

こんな感じで俺の体育祭は終わった。

体育祭の収斂（後書き）

体育祭は終了。

でも砂埃って本当に凄いですよね。

風の日とかだったら最悪…

少女の取り扱い注意報

体育祭明けて次の日の午後1時。俺、翔一、龍、真汰で痛い体を引
きずってスタジオに行っていた。

真汰はドラムだから体力が必要だとか言って毎日走りこみはしてる
ため筋肉痛にはなっていないが俺と翔一と龍が酷かった。

俺はまず足が痛くて立ってられないためイスを使う。そして何故か
腕も痛くて動かし続ける事ができない。

翔一は足が痛い俺と同じ症状のためイスにボスンと座る。

龍は応援で声がガラガラだと。ファルセットが出ないらしい。

なのでやった曲を分割して練習する事にした。

「くっそ、ペダル操作だけで痛いぞ……」

「俺はベースで良かったわ……」

「本当、お前ら体力ねえな」

一つ一つに痛々しい行動をする俺らに呆れ顔の真汰。

くっそ、お前は良いな！

「ねえ、何で俺は立ってるのかなー？」

そう言ってくる龍。イスは二つしか無かったから我先にと言う感じ
でイスを取った結果龍が余った。

「一応、俺も筋肉痛有るからね？」

「さっき言っただけじゃん」

喉が痛いしか聞いてないよ。足が痛いなんて一言も聞いてない。

「おし、セツティング終わったし始めるぞー！」

「え、ちよつと！俺、死んじゃう！」

「大丈夫だ！運動部なら普通だから！」

「何なんだよー！！」

知るかという感じに演奏を始めた。右腕も痛えな。手首だけ動かそう。

途中休憩、俺は外にジュースを買いに出た。中は飲食禁止なのだ。だから、外に出て飲むしかない。機材とかに零したら賠償金払わねばならんからね。

外でコーラを買いプルタブを引こうとすると手の中から缶が消えた。消えた方向を見ると穂奈美が立ってた。

「何してるんだ?!」

「いや、喉乾いたから」

「自分の買おうぜ？」

穂奈美の手には120円。買うために出てきたんだな。

「良いじゃない。ケチケチしないでよ…はい、返すわ」

「これって…」

「早く飲まないと気が抜けるわよ？」

いや、飲んだら間接キスじゃね？穂奈美はそんな事を気にしない人なのか？少しドキドキする。

が、気にしない人なら俺も飲んじまう。ごちそうさま。

「はい、私のアクエリも一口あげるわよ」

「…ありがとう」

ドキドキしっぱなしです。異性と物体を閉して接触をしているのにドキドキしてるわけで別に穂奈美にドキドキはしていない…筈だ。

やばい、ゲップでそうだ。うつぶ。

「ふう、生き返る…喉が痛くて歌えないのよ」

「ああ、今日練習だったのね」

「うん、初練習になるのかな？何回か顔は合わせてるんだけどね」

たまたまドッキングしてしまったのだろう。こうしてバンド間で交流が生まれるとなかなか嬉しかったりする。

同じような思考を持ってたり全然世界観が違うやつも居るからな。

「休憩時間終わりだし…戻るな」

「うん、じゃあね。後で」

聞き返したかったが龍に呼ばれたから聞きそびれた。痛い足を持ち上げてスタジオに入る。

「じゃあ、新しい方練習始めようか」

ただし分けて練習な、と真汰は付け加えた。正直ありがたい。

「おし、じゃあ芳樹の最初のフレーズから入るから翔一は測って入れよ。じゃあ、行くぜー！」

カンカンカン。ドラムスティックでカウントを取り始める。

さつきより腕は不思議と痛くなかった。

スタジオを片付けて外に出る。すると穂奈美がいた。

「マイク買いたいから楽器屋に着いてきて！」

と了承すると近場にある大型ショッピングモールの楽器屋に連れていかれた。

時刻は午後4時50分。4時30分にスタジオから出てきて20分で着いた。

歩いてる間、バンドの事や学校の事を話してた。足に痛みはなかった。

楽器屋に着くとすぐさまマイク売り場に直行。安いから5万円ぐらいまでのを取り扱ってる。

楽器を本格的に買うなら東京に行くしかないが今日は流石に時間がない。

「ねえ、似合う？」

「似合うもなにも使いやすさだぞ」

星とかがペイントされてるマイクを歌う感じに口元に持つてきていた。似合うっちゃ似合う。女性ロック歌手みたいな感じだ。

「でもこれ気に入ったなあ……」

「一回歌わせて貰えよ」

「恥ずかしくない？」

恥ずかしいも何も、ギターを買う時も衆人観衆がいるなかで一回は

弾くのだ。

「そんな事を言わずに…すみませーん！」

店員がやってきて一回マイクを試したいの旨を伝えて歌ってもらった事にした。

「これ、何の羞恥プレイよ…」
「わー！…！」

女の子がそんな事を口にするんじゃないやありません！

ともかく色々あってマイクは買った。

「ふふ…ありがとうね」
「ああ…」

どういう訳か、こいつにマイクを買ってあげた。
何でだろうな？

その後、奢ると言って譲らなかった穂奈美とファミレスで夕飯を取り、帰路につく。

「じゃあね、芳樹。送ってくれてありがとう！」

「ああ、また明日な」

「やだあ、明日は休みよ？」

「え、マジ？」

知らなかった。携帯を開くと土曜日の文字があった。

「ふふっ、バカねえ。お休み！」

手を振って家に帰って行く。

自宅への帰路がいつもより長く感じた。

少女の取り扱い注意報（後書き）

ファルセット…裏声
です。

龍くんは影ながらの苦勞者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3897y/>

少年少女のソノリティ

2011年11月22日15時15分発行